

あとがき

原子力学会秋の大会が終わると、10月号発行に向けて部会全体会合での内容や合同セッションの内容などを盛り込むべく、記憶を手繰り寄せて記事を書いている。記事を書きながら、脳裏にこびり付いて離れないのは、やはり今回の会場でも、添付写真のように原子力学会に対する批判であった。

「仕方がないのだ」と自分を説得しながら、しばし看板を眺めていた。自分の人生を原子力と共に生きることを選んだことに後悔はない。ならば一歩前に進んで、喜んで打たれようぞ。

これからの原子力をどうすべきか、研究をどの方向へ舵を向ければ良いのか、当然いろいろ模索していかなければならない。このような意識を受けてだろうか、2012

年秋の大会では、炉物理部会、「シグマ」特別専門委員会、核データ部会合同セッションが「炉物理・核データの将来に向けて」というテーマで開催され、若手研究者が代表して、将来に向けてどのように活動をしていくべきかについて意見を述べる場が設けられた。学会2日目の昼休み直後のセッションにも係らず多くの参加者があり、会場は満席に近かったと記憶している。炉物理・核データの将来をどうするか、参加者全員の意識のベクトルはまさにその一点に交差し、そこで炉物理側と核データ側からの若手の意見が小気味よい化学反応を起こす。良き哉。議論を聞きながら、基礎学問としての炉物理、核データは、これからも絶対に死なない、と感じた。発表をされた若手研究者の顔を見ながら、心の中で「名もなき道を行くなかれ...」という詞を贈っていた。何の歌詞だったろうか？ああっ、寮歌だ。

「藻の花ひらくうつし世に
名もなき道を行く勿れ

潮の流れ渦をまく
われ等が行手星光る」

(旧制第四高等学校寮歌「北の都」)

2012年10月号編集 中村詔司

日本原子力学会核データ部会
核データニュース編集小委員会

喜多尾憲助 (元放医研)、井頭政之 (東工大)、石川 眞 (原子力機構)、
岩本 修 (原子力機構)、中川庸雄 (元原子力機構)、吉田 正 (元東京都市大学)、
渡辺幸信 (九大)、山野直樹 (福井大)、河野俊彦 (LANL)、大塚直彦 (IAEA)
中村詔司 (委員長、原子力機構) [編集]石橋貞子